

## 笑顔のために

星野学園中学校 2年 関 彩花

「よく、こんなに集めたな」

年末の大掃除。部屋の整理をしていると、ふと箱に入った五十本近くの鉛筆を見つけた。思い返せば小学校低学年のころ、可愛い鉛筆を集めることが好きだった私は、母に鉛筆を買ってもらったときにこの箱に入れて大切に保管していた。この箱は、私にとって宝物だった。しかし、中学生になり、鉛筆を全く使わなくなってしまった。もったいないと思いつつも、使わないのであれば思い切って断捨離をしよう、そう思っていた。

「不用品で世界の子供を笑顔に」

ある日、こんな記事を見つけた。不要になった物を世界の子供に送るというプロジェクトだった。そこには、日本のキャラクター文房具やぬいぐるみなどを大事に抱え、嬉しそうに笑うたくさんの子供たちの写真があった。

私はその時、世界には両親がおらずお金がない子、学校へ行きたくても行けない子、靴が買えずに裸足で生活している子など夢や希望を失った子供がたくさんいること、そしてその子供たちはペン一本をも手にすることが出来ない現実を知り、とても心が痛んだ。

日本では、欲しいときに物が買え、家の中が物であふれている事が当たり前なことだ。だからこそ「断捨離」という言葉があるのだと思う。しかし世界では、その当たり前が決して当たり前ではないということに私は気づかされた。それと同時に、もしかすると私の鉛筆一本で世界の子供を笑顔にすることができ、希望を与えられるのではと思い、すぐにこのプロジェクトへの参加を決めた。

年末ということもあり、古着やぬいぐるみなどたくさんの不用品が出た。正直、不用品を送るなんて迷惑になるのではと思ったが、世界の子供たちの笑顔を想像しながら一つ一つ段ボールに詰めていき、最後に宝物だった鉛筆の箱を入れ、封をした。

私にとって「宝物」だった鉛筆。しかし不要になって捨ててしまえばただのゴミでしかなかった。それでも私の不用品を今度は「宝物」として大事に使ってくれる子供がいるということに、私はとても幸せな気持ちになった。また、物資を嬉しそうな笑顔で抱きしめる世界の子供の写真を見る度に、このプロジェクトに参加し、国際社会の一員として国際協力に参加できたことを、とても嬉しく、誇りに思った。

日本の社会は豊かで、私自身、何も不自由はなく暮らせている。それが当たり前だからこそ、物を大切にするという気持ちが軽くなってしまっていると思う。それでも、物を簡単に買うことができない国の子供たちにとっては、鉛筆一本、ぬいぐるみ一個を手にとってただで幸せと感じる子供がたくさんいるということを決して忘れてはいけないと思った。

これからも、物を大切にすることを大切に、国際協力に参加したいと思う。世界中の子供たちの笑顔のために。